

1. 心のクリニック活動報告（2008年9月～2009年8月）

1) 心のクリニックの運営体制

(1) スタッフ構成

心のクリニックの2009年8月時点のスタッフ構成は、表1に示したように相談員18名（本学心理学科専任教員9名、非常勤相談員9名）、研修相談員2名、院生相談員27名（修士課程2年生13名、修士課程1年生14名）、事務職員2名であり、総勢49名で心のクリニックの運営に当たっている（2009年度のスタッフは、3. スタッフ名簿に示している）。

表1 スタッフ構成

相談員		研修相談員	院生相談員		事務職員	計
本学教員	非常勤		M1	M2		
9	9	2	14	13	2	49

(2) 施設について

心のクリニックは、追手門学院大学地域支援心理研究センターの1、2階にあり、以下のよう施設において相談活動を行っている。

1階：事務室および受付

プレイルーム 2室

2階：相談室 3室

集団カウンセリング室 1室

心理検査室 1室

資料室 1室

スタッフルーム 1室

(3) 心のクリニック相談員会議

心のクリニック相談員会議は2006年4月から原則として月1回の開催となり、2008年9月から2009年8月の期間に11回の会議を行った。相談員会議は、本学教員である相談員に加え事務職員（記録者）1名が参加し、主にクリニックの運営や大学院生の臨床実習の進め方等について協議を重ねている。

(4) インテーク・カンファレンス

インテーク・カンファレンスは、2007年度までは月曜日または金曜日の12：45～13：15の時間に参加可能なものが参集し随時開催していた。しかし、インテーク・カンファレンスの教育的意義を考えれば、大学院生（特にケース担当経験の乏しいM1）は必修とした方が良いとの意見が多く、2008年4月からは、月曜日5時間目（16：40～18：00）の臨床心理基礎実習の中

で行われるようになった。参加教員は、臨床心理基礎実習担当教員は勿論であるが、心のクリニック相談室長およびその他心理学科専任教員もオブザーバーとして参加しているため、昨年度までより活発な討議が可能となった。M1の必修科目なので、M1は全員である。しかし、インテークおよび陪席者としてM2がインテークにかかわる機会も多く、参加希望のM2が加わり毎回20名前後の院生が参加した。そこでは電話受付やインテーク面接の情報に基づいてケースの概要が報告され、ケース担当者の人選、初期の見立てと面接方針等について検討を行っている。

インテーク・カンファレンスは、新規ケースについて相談員が臨床心理士としてどのような臨床的判断を加えるのか、また初期の見立てや方針がどのようなものになるのかについて、院生相談員が身近に学ぶ機会を提供できるように意図しており、大学院生の教育の一環としての性質も持っている。

（5）研修相談員制度

本学臨床心理学コース修了者で臨床心理士の資格取得を目指す者、ないしはそれと同等以上の学力・経験をもつ学外者で、臨床研修を希望する者に対して、研修相談員の制度を設けている。2009年度は2名の研修相談員が在籍し、インテーク面接、電話受付、心理査定、心理面接、プレイセラピー、研究などの業務に関わっている。心理面接、心理査定に関しては本学心理学科専任教員もしくは非常勤相談員（臨床心理士）からスーパーヴィジョンを受けており、また研究に関しては心理学科専任教員から指導を受けている。

2）相談活動について

（1）開室時間

開室時間は、2008年度までは木曜日を除く月曜日から金曜日の午前10時から午後5時までであったが、ケース数の増加を望む声が大学院生からあがり2009年4月から木曜日も開室することとなった。よって、開室時間は、月曜日から金曜日の午前10時から午後5時までとなった。

（2）相談件数

① 電話相談および問い合わせ件数

2006年9月から2007年8月までの一年間の電話による相談と問い合わせ件数を、表2に示した。連携機関・学校関係からの紹介、地域の病院やクリニックからの紹介、また新聞記事や本学ホームページ等により、心のクリニックの情報を知り、電話連絡がある場合が多かった。この一年間で57件の電話相談および問い合わせがあり、その内、インテークにつながったものは39件、他機関へ紹介したものが1件、電話のみが10件、インテークのキャンセルが6件、その他が1件となっている。

表2 電話相談および問い合わせ件数

内訳	インテーク	リファー	電話のみ	インテークキャンセル	その他	計
件数	33	0	25	0	0	58

次に、月別の電話相談および問い合わせ件数を表3に示した。最も多かった月が2008年の9

月の12件、次いで2009年3月の8件であり、一方最も少なかった月が2009年の1月の1件であった。

表3 月別電話相談および問い合わせ件数

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	計
インテーク	7	5	3	1	1	6	1	1	1	5	1	1	33
リファール													0
電話のみ	5		1	1			7	4	2	1	2	2	25
インテークキャンセル													0
その他													0
計	12	5	4	2	1	6	8	5	3	6	3	3	58

② 新規相談受理人数

新規相談受理人数を、表4に示した。この1年間の新規相談受理人数は、62名であった。その内訳は0～6歳が12件、7～12歳が7件、13～18歳が4件、19～25歳が1件、26～40歳が23件、41～60歳が14件、61歳以上が1件となっている。当クリニックでは、幼児を対象とする集団遊戯療法「にこにこ教室」を開催していることから、幼児とその保護者の年齢層の受理人数が多くなっているのは例年通りである。これらの数値には遊戯療法と並行面接の親子の人数を含んでいる。

表4 新規相談受理人数

年齢層	0～6	7～12	13～18	19～25	26～40	41～60	61～	計
人数	12	7	4	1	23	14	1	62
%	19.4	11.3	6.5	1.6	37.1	22.6	1.6	100

* インテークを2回実施したケースを含む

* インテークのみ同席者があったケースを含む

次に月別の年齢層別新規相談受理人数を表5に示した。受理人数の最も多い月は2008年の10月の15件、次いで2009年の7月の11件であり、最も少ない月は2008年の12月、2009年の4月の0件であった。例年比較的受理面接が多い年度初めの4月～6月に少なかったのが本年度の特徴である。また受理面接が、年末の12月に少ないのは例年通りである。

表5 月別年齢層別新規相談受理人数

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	計
0～6	3	5	2			1					1		12
7～12	1	1			1		1				2	1	7
13～18		1					1			1	1		4
19～25			1										1
26～40	3	3	3		2	2	2		1		7		23
41～60	1	5				1	1		2	3		1	14
61～						1							1
計	8	15	6	0	3	5	5	0	3	4	11	2	62

* インテークを2回実施したケースを含む

* インテークのみ同席者があったケースを含む

③ インテーク面接以後の経過

インテーク面接後の経過の件数を表6-1に、その人数を表6-2に示した。件数の上では、インテーク面接以降、継続の契約となったケースは33件であり、インテーク面接のみが3件、終結が14件であった。「インテークのみ」には、来談希望者の希望する通所曜日・時間及び料金の面で都合が合わず治療契約に至らなかったケースが含まれている。本年度の際立った特徴は、例年受理面接後の終結件数および終結人数は数件（数人）であるところだが、終結件数が14件で終結人数が25件であったことである。例年ならケースに占める割合の10%以下であるところが40%以上になっている。

表6-1 受理面接以後の経過（件数）

内訳	インテークのみ	継続	リファー	終結	計
件数	3	16	0	14	33
%	9.1	48.5	0.0	42.4	100

表6-2 受理面接以後の経過（人数）

内訳	インテークのみ	継続	リファー	終結	計
人数	6	26	0	25	57
%	10.5	45.6	0.0	43.9	100

④ 来談者実人数と年齢層

この一年間の来談者実人数とその年齢層を表7に示した。来談者実人数の総計は119名であった。2008年9月以前に受理をして継続中のケースを含んでいるため、来談者実人数は受理面接の件数より多くなっている。26～40歳の年齢層の来談者が40名と最も多く、次いで41～60歳が25名と多い。これらの年齢層と0～6歳（22名）と7～12歳（19名）が多くなっているのは、先にも挙げたように、0～6歳の層ににこにこ教室の来談者が占めるところが多いからと考えられる。また幼稚園から大学院までの園児・児童・生徒・学生を擁する本学の特徴とし、関連校からの紹介の増加も前思春期層の占める割合の多さが関与していると考えられる。

表7 来談者実人数と年齢層

年齢層	0～6	7～12	13～18	19～25	26～40	41～60	61～	計
人数	22	19	8	3	40	25	2	119
%	18.5	16.0	6.7	2.5	33.6	21.0	1.7	100

⑤ 来談者実人数と居住地域

来談者実人数の居住地域を表8に示した。来談者の居住地域では、本学の所在地である茨木市居住の来談者がもっとも多く82名と全体の68.9%を占めており、次いで近隣の北摂地域の高槻市（7名）、吹田市と大阪市、豊中市（各6名）、が多かった。京都や滋賀など遠方のケースは非常勤相談員の新規雇用に伴いついてきたケースにより増加している。

表8 来談者実人数と居住地域

居住地	大阪府									京都府	奈良県	滋賀県	合計
	茨木市	高槻市	吹田市	大阪市	豊中市	箕面市	岸和田市	池田市	羽曳野市	木津川市	生駒郡	大津市	
人数	82	7	6	6	6	3	2	1	1	3	1	1	119
%	68.9	5.9	5.0	5.0	5.0	2.5	1.7	0.8	0.8	2.5	0.8	0.8	100

⑥ 相談内容別相談件数

相談内容別相談件数を、表9に示した。相談内容で最も多かったのは「子どもの問題」に関する親からの相談であり56件であった。ついで「言葉の発達の遅れやコミュニケーションの問題」の22件、「自閉症スペクトラム」の11件と、幼児・児童・生徒についての保護者からの相談が上位を占めている。これらの多くは連携機関から紹介を受けたケースであり、例年通りの傾向を示している。

表9 相談内容別相談件数（複数記入）

来談者主訴の内容	人数
言葉の発達の遅れやコミュニケーションの問題（幼児・児童）	22
自閉症スペクトラム（疑いも含む）	11
不登校・不登園	8
行動上の不適応問題（幼児・児童・生徒）	7
子どもの問題（親からの相談）	56
子どもの身体症状（親からの相談）	3
対人関係	1
自分自身の実存に関する問題	4
子ども以外の家族の問題	1
精神的疾患	3
身体的問題・心身症	2
コンサルテーション（教師・上司など）	1

⑦ 月別来談者延べ人数とその面接の種類

各月別の面接種別ごとの延べ来談人数を表10に示した。この1年間の延べ来談人数は1171名であり、その内2008年10月が166名で最も多く、2008年12月の161名、2009年1月の130名と続いている。延べ来談者数が最も少なかったのは、2009年の5月の39名であり、次いで2009年8月の46名であった。例年来談者が少ない月は、年度末や夏季休暇の休室期間を含むことが多いのであるが、本年度は年度初めから来談者が激減しているのが見て取れる。これは年度末に終結したケースが多いことに起因している。

面接種類別では、個人遊戯療法が子ども314名とその親304名と相談者の最も多くを占めている。次いで集団遊戯療法の子ども148名、親138名となっている。子どもの問題に関して並行面接で進められるケースが全体の多くを占めているのも例年と変わらない。

1. 心のクリニック活動報告（2008年9月～2009年8月）

表10 月別面接種別相談人数（延べ人数）

		2008 年度							2009 年度					計
面接種別		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
受理面接		8	15	6		3	5	5		3	4	11	2	62
心理検査		3	1								1			5
集団遊戯療法	(子)	7	26	18	39	23	17	18						148
	(親)	7	24	16	36	21	16	18						138
個人遊戯療法	(子)	33	39	23	34	30	33	23	20	15	27	22	15	314
	(親)	32	38	22	34	30	31	23	19	13	25	22	15	304
並行カウンセリング	(子)	4	3	1	5	6	1	2			1	5	5	33
	(親)	8	8	6	8	9	7	5	2	2	3	5	4	67
カウンセリング		15	11	9	5	8	7	5	10	6	10	8	5	99
スーパーヴィジョン														0
コンサルテーション			1											1
合 計		117	166	101	161	130	117	99	51	39	71	73	46	1171

3) 高度専門職（臨床心理士）養成について

心のクリニックの教育・訓練機関としての役割

本学大学院心理学研究科心理学専攻臨床心理学コースは、2006年4月に日本臨床心理士資格認定協会臨床心理士養成第1種指定大学院となって四年目を迎えた。臨床心理士のアイデンティティは臨床心理学における心理面接、心理査定、地域援助、事例研究や実証的研究を実践し、またスーパーヴィジョンを受けることによる専門性の向上にあるとされ、このような専門性のアイデンティティを確立できるように専門家を育成することを目的としている。したがって学内外あわせて多数の実習施設において実践的訓練の機会を設けている。

心のクリニックは地域に開かれた心理相談施設であるとともに、上記の如く臨床心理士養成機関でもある。したがって、来談者に対しては、電話による問い合わせやインテークの段階でその旨を説明し、臨床心理士有資格者の指導のもとに大学院生がケース担当をするということについて了解してもらっている次第である。そのために大学院の授業においては、心理臨床の実践ができるように厳しい訓練がなされている。

たとえば、茨木市障害福祉センター内の早期療育相談室「すくすく教室」との連携による「にこにこ教室」においては大学院生が集団遊戯療法のセラピストを担当している。また、これ以外の個別の来談者についてはインテーク面接後、各ケースについて担当者の検討がなされ適切な処遇がなされるように配慮を行っている。

以下に大学院生の学内外での実習活動について記す。

「臨床心理基礎実習・臨床心理実習」の学内実習について

① 大学院1年次は、当クリニックにおいて臨床心理基礎実習の授業として、次のような実習を行っている。

- ・プレイルームや相談室の整備
- ・インテーク・カンファレンス

心のクリニックのインテーク・カンファレンスに参加し、ケースの概要からの見立て、処

遇の仕方などについて学んでいる。

- ・ ケース・カンファレンス

修士2年次生に対して行っているケース・カンファレンスに参加することを通して、ケース・プレゼンテーションの仕方や心理療法の過程、ケースに対する理解、心理臨床的援助の方法などを総合的に学んでいる。

② 大学院2年次には、当クリニックにおいて臨床心理実習の授業として、以下のような実習を行っている。

- ・ プレイルームや相談室の整備

- ・ 「にこにこ教室（前期10回、後期10回）」および保護者グループへの参加

- ・ 不登校や行動面での問題を抱えた幼児・児童・生徒を対象として個別の心理面接や遊戯療法および心理査定の実践。これらについては全て各セッション終了後に臨床心理士より「今・ここ」ベースのスーパービジョンを受け、ケースへの関わり方や理解の仕方を学習している。

- ・ インテーク・カンファレンス

心のクリニックのインテーク・カンファレンスに参加し、ケースの概要からの見立て、処遇方針の立て方などについて学んでいる。

- ・ ケース・カンファレンス

実際に院生自身が担当しているケースの経過について90分の時間をかけて、発表し、相談員（本学教員）や非常勤相談員からの指導や提案を受けることによって、クライアントの理解や関わり方について検討を行っている。これにより自身のセラピストとしての関わり方を丁寧に見直し、より適切に今後のケースに関わるための展望を得ることを目的としている。

- ・ スーパービジョン

さらに各院生は担当したケースについて個別に実習担当の相談員（学外教員：2008年度末までは学内教員）より概ね2週間に1回、スーパービジョンを受けることになっている。これにより、さらに詳細に自身の心理臨床的援助の仕方や、ケースの中でのセラピストとしての自分の在り方に気づき、より専門性を確実なものとするようにしている。

「臨床心理実習」学外施設における実習活動について

臨床心理実習担当教員（学内）：倉戸 由紀子・中村 このゆ・橋本秀美（2009年4月から）・馬場 天信・樋口 勝也（2008年3月まで）・溝部 宏二

臨床心理実習担当教員（学外）：東 斉彰（住友病院）・大島 剛（神戸親和大学）・加藤 敬（こども心身医療研究所）、川原 稔久（大阪府立大学）、田中 誉樹（ノートルダム女子大）・畠瀬 稔（関西人間関係センター）・平田 俊明（京都文教大学）・本宮 幸孝（関西福祉科学大学）・中西 龍一（園田学園大学）・森田 善治（龍谷大学）・山中 祥匡（山中臨床心理研究所）

学外実習担当臨床心理士：岩本 真由・鞠谷 祐子・白山 真知子・永井 享・仲倉 高広・藤井 恵子・増子 高通・宮本 孝子

1. 長期実習

（1）施設名：茨木市教育研究所

1. 心のクリニック活動報告（2008年9月～2009年8月）

臨床心理士：鞠谷 祐子

所在地：茨木市駅前4丁目6-16

期間：2007年4月～2008年3月、毎週木曜日9：00～17：00

（1日8時間×45週、約360時間）

実習者数：3名

実習内容：不登校、発達障害の児童・生徒への訪問面接・適応指導教室でのグループ・プレイセラピー。その後のスーパービジョン、およびケース・カンファレンスへの参加。

（2）施設名：摂津市保健福祉部こども育成課家庭児童相談室

臨床心理士：白山 真知子

所在地：大阪府摂津市千里丘東1-16-2

大阪府摂津市鳥飼2-1-4

期間：2008年4月～2009年3月、毎週火あるいは水曜日9：00～17：00

（1日8時間×45週、約360時間）

実習者数：2名

実習内容：母子同室の集団遊戯療法（くまさん教室：良好な母子関係を促進するグループ、対象は幼児）または母子分離をして行う集団遊戯療法（自閉傾向のある幼児のグループ）、その後ケース・カンファレンスに参加、および個別の遊戯療法、カウンセリング、新版K式発達検査の実施。個別のケースについては毎回事後のスーパービジョンと適宜開催のケース・カンファレンスにて指導を受ける。

（3）施設名：豊中市子ども未来部子育て支援課子育て支援センター「ほっぺ」

臨床心理士：藤井 恵子

所在地：大阪府豊中市中桜塚3-1-1

期間：2008年4月～2009年3月、毎週火曜日9：15～17：15

（1日8時間×45週、約360時間）

実習者数：1名

実習内容：母子同室の集団遊戯療法（1才児グループ、2才児グループ：軽い言語発達の遅れ）と母親グループ、その後のケース・カンファレンスに参加。個別の遊戯療法（被虐待の疑いのある未就園児、発達に遅れのある幼児、情緒面の問題を持つ児童）と、毎回事後にスーパービジョンを受ける。その他に、虐待に関する研修会への参加。保健師、保育士との協働を体験し、その後スーパービジョンを受ける。発達検査の実施とその後のスーパービジョンとケース・カンファレンスに参加。

（4）施設名：医療法人北斗会さわ病院（総合病院精神科）

臨床心理士：増子 高通

所在地：大阪府豊中市城山町1-9-1

期間：2008年4月～2009年3月、毎週火曜日8：30～16：30

（1日8時間×45週、360時間）

実習者数：2名

実習内容：予診の陪席の後、実際に予診を実施し（統合失調症圏、気分障害、アルコール依存症、神経症圏等）、毎回事後にスーパービジョンを受ける。通院・入院カルテを読み込み、ケース・カンファレンスに参加することで、精神障害者について理解を深め、多職種の協働とチーム医療の実際を知る。病棟での統合失調症患者との面接、デイ・ケアにおける集団療法（統合失調症圏、気分障害等の通所患者）のなかで、スタッフの一員として精神科リハビリテーションの一環に携わる。心理検査（統合失調症：WAIS-R・ロールシャッハテスト、心身症女性：バウムテスト・ロールシャッハテスト）を実施し、その後スーパービジョン（実施の仕方、検査の分析方法と報告書作成の仕方について）を受ける。

（5）施設名：財団法人復光会垂水病院（精神病院）

臨床心理士：岩本 真由

所在地：神戸市西区押部谷西盛566

期間：2008年4月～2009年9月、毎週火あるいは木曜日8：45～17：00

（1日8時間×20週、約160時間）

実習者数：3名

実習内容：アルコール・薬物依存症についての研修を受け、院内治療・リハビリテーションプログラム（病棟グループ）酒害教室、AAメッセージ（アルコール・薬物依存症の院内治療プログラム）アルコール・薬物依存症の入院および通院患者とその後のケース・カンファレンスに参加する。入院患者に対する個別面接（統合失調症圏・アルコール依存症）をし、毎回事後にスーパービジョンを受ける。統合失調症圏患者入院集団精神療法へコ・リーダーとして参加し、その後スタッフ・カンファレンスを受ける。個別で心理検査（神経症圏：ロールシャッハテスト、アルコール依存症：WAIS-R）を実施し、その後の指導（実施の方法、検査の分析方法と報告書作成の仕方について）を受ける。

（6）施設名：国立病院機構大阪医療センター

臨床心理士：仲倉 高広

所在地：大阪府中央区法円坂2-1-14

期間：2008年4月～2009年3月、毎週木曜日9：00～17：00

（1日8時間×40週、約320時間）

実習者数：2名

実習内容：毎週あるカンファレンスへ参加する。前期はHIV患者さんへのインタビュー内容について、後期は担当ケースについて臨床心理士からスーパービジョンを受ける。他校からの実習生と合同で、ロールシャッハ、バウム、K式、認知機能検査などの勉強会がルーチンとして行われる。その他不定期ではあるが、精神科の予診や診察の陪席、認知機能検査や発達検査の実施と所見作成、HIVや血友病の講義、がん緩和ケアサポートチーム回診への参加、AIDSカウンセリング研修会や看護師研修会への参加などが義務付けられている。

（7）施設名：大阪府衛生会希望の杜（情緒障害児短期治療施設）

臨床心理士：永井 享

所在地：大阪府高槻市大字奈佐原955

期間：2008年4月～2009年3月、毎週火曜日12：00～18：00

（1日5時間×45週、約229時間）

実習者数：2名

実習内容：午前中は施設内の環境整備、午後はケース記録から被虐待児について見立てと処遇の仕方の指導を受け、その後そのケースについての個別遊戯療法（被虐待の小学生～中学生）、および集団療法（被虐待、保護者蒸発等による養育放棄の小学生～高校生）への参加。その後のケース・カンファレンスとスーパービジョンおよび施設内学級での心理的サポート、被虐待児のケアについての研修を受ける。

2. 心理査定実習

（1）実習施設名：桃花塾（知的障害児・者施設、知的障害者更生施設）

臨床心理士：宮本 孝子

所在地：大阪府富田林市大字喜志206

期間：2009年2月12日 13：00～17：30（4時間）

実習者数：13名

実習内容：事前研修として11月～12月にかけて、臨床心理査定演習で実習した新版K式発達検査法を実践現場で用いるために、より詳細な実施方法の習得を目指し（第3葉～第6葉までのロールプレイも含む）、実際に精神発達遅滞児・者に発達検査を行う際の心得と観察のポイントなどの指導を行う。

実習当日は、知的障害児・者およびその更生施設についての現況の研修を受けた後、13～50才の入所者を対象に新版K式発達検査を実習者1人1ケース実施し、結果の処理と判定終了後にスーパービジョンを受ける。その後、学内において検査報告書の作成、さらにレポート課題を提出する。

事後研修：実習院生それぞれが検査を行った知的障害児・者についての理解をさらに深められるようカンファレンスを持つ。

3. 短期病院実習

（1）医療法人北斗会さわ病院（総合病院精神科）

臨床心理士：増子 高通

期間：2009年7月13日 13：00～17：00（4時間）

実習者数：13名

実習内容：急性期精神医療と精神障害者リハビリテーションシステムを備える病院の概要、地域における精神病院のあり方についての研修の後、病院内（病棟・デイケア）や通所授産施設、グループホーム、福祉工場などで実習（統合失調症圏や気分障害の患者と関わる体験）。終了後、全施設に関しての質疑応答と、医療機関における臨床心理士の役割についての研修を受け、実習レポートを提出する。

(2) 財団法人復光会垂水病院（精神病院）

臨床心理士：岩本 真由

実習期間：2009年9月28日 14：00～17：00（約3時間）

実習者数：13名

実習内容：主に中・高年のアルコール・薬物依存症と統合失調症（慢性期）治療が中心の単科精神病院（病棟、外来、デイケア）の概要、各治療プログラムについての説明を受けた後に、病棟内にて実習（病棟内治療プログラムにて、アルコール・薬物依存症や統合失調症患者と関わる体験）を行う。終了後、全施設についての質疑応答と、医療機関における臨床心理士の役割についての研修を受け、実習レポートを提出する。

2. 心理学専攻臨床心理学コース2009年度カリキュラム

履修区分		授 業 科 目	単位	担 当 者	配当年次	学期	備 考
必修		臨 床 心 理 学 特 論 1	2	中村このゆ 教授	1年次以上	前期	臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 学 特 論 2	2	中村このゆ 教授	同	後期	臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 面 接 特 論 1	2	倉戸由紀子 教授 橋本 秀美 教授 永野 浩二 准教授 駿地真由美 准教授	同	前期	臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 面 接 特 論 2	2	倉戸由紀子 教授 橋本 秀美 教授 永野 浩二 准教授 駿地真由美 准教授	同	後期	臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 査 定 演 習 1	2	中村このゆ 教授 中鹿 彰 准教授 辻 潔 准教授 馬場 天信 准教授	同	前期	2時限連続開講 臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 査 定 演 習 2	2	中村このゆ 教授 中鹿 彰 准教授 辻 潔 准教授 馬場 天信 准教授	同	後期	2時限連続開講 臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 基 礎 実 習 A B C D	2	中鹿 彰 准教授 辻 潔 准教授 永野 浩二 准教授 駿地真由美 准教授	1年次	通年	2時限連続開講 臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 実 習 A B C D E F	2	倉戸由紀子 教授 中村このゆ 教授 橋本 秀美 教授 溝部 宏二 准教授 馬場 天信 准教授 永井 享 講師 利根川雅弘 講師 安本 淳 講師 宮本 孝子 講師 増子 高通 講師	2年次	通年	2時限連続開講 臨床心理学コース専攻生のみ 臨床心理基礎実習を修得した者のみ Fは学外実習施設非常勤講師
選択必修	A	臨 床 心 理 学 研 究 法 特 論 1	2	倉戸由紀子 教授 中村このゆ 教授 橋本 秀美 教授 中鹿 彰 准教授 辻 潔 准教授 永野 浩二 准教授 駿地真由美 准教授 馬場 天信 准教授	1年次以上	前期	
		臨 床 心 理 学 研 究 法 特 論 2	2	倉戸由紀子 教授 中村このゆ 教授 橋本 秀美 教授 中鹿 彰 准教授 辻 潔 准教授 永野 浩二 准教授 駿地真由美 准教授 馬場 天信 准教授	同	後期	
	B	心 理 統 計 法 特 論	2	東 正訓 教授	同	不開講	(隔年開講)
		人 格 心 理 学 特 論	2	井上 知子 教授	同	不開講	(隔年開講)
		認 知 心 理 学 特 論	2	石王 敦子 教授	同	前期	
	C	教 育 心 理 学 特 論	2	三川 俊樹 教授	同	前期	
		社 会 心 理 学 特 論	2	東 正訓 教授	同	前期	(隔年開講)
		犯 罪 心 理 学 特 論	2	松野 凱典 教授	同	不開講	(隔年開講)
	臨 床 心 理 関 連 行 政 論	2	田中耕二郎 教授	同	後期		

選 択 必 修	D	精 神 医 学 特 論	2	溝部 宏二 准教授	同	後期	(隔年開講)
		神 経 生 理 学 特 論	2	田中 秀明 講師	同	前期	
		障 害 者 (児) 心 理 学 特 論	2	石王 敦子 教授	同	不開講	
	E	投 映 法 特 論	2	馬場 天信 准教授	同	前期	集中(隔年開講)臨床心理学コースのみ 集中(隔年開講)臨床心理学コースのみ 臨床心理学コース専攻生のみ
		臨 床 心 理 地 域 援 助 特 論	2	森田 喜治 講師	同	前期	
		心 理 療 法 特 論 1	2	久野 能弘 講師	同	前期	
		心 理 療 法 特 論 2	2	佐野 直哉 講師	同	不開講	
		学 校 臨 床 心 理 学 特 論	2	倉戸由紀子 教授	同	後期	
	心 理 療 法 実 習 1	1	加藤 敬 講師	1年次	後期	臨床心理学コース専攻生で、臨床心理基礎実習を修得した者のみ 学外スーパービジョン	
		心 理 療 法 実 習 2	1	加藤 敬 講師	2年次		前期
	臨 床 心 理 学 研 究 法 演 習 I	1	中鹿 彰 准教授	1 年次	前期		
			辻 潔 准教授				
			永野 浩二 准教授				
			駿地眞由美 准教授				
		2	中鹿 彰 准教授	同	後期		
			辻 潔 准教授				
			永野 浩二 准教授				
			駿地眞由美 准教授				
		臨 床 心 理 学 研 究 法 演 習 II	1	倉戸由紀子 教授	2年次	前期	
				中村このゆ 教授			
	橋本 秀美 教授						
	馬場 天信 准教授						
	臨 床 心 理 学 研 究 法 演 習 II	1	倉戸由紀子 教授	同	後期		
			中村このゆ 教授				
			橋本 秀美 教授				
			馬場 天信 准教授				
臨 床 心 理 学 コー ス 演 習 1	A	倉戸由紀子 教授	同	前期	(修士論文指導) 臨床心理学コース専攻生のみ		
	同 B	中村このゆ 教授					
	同 C	橋本 秀美 教授					
	同 D	中鹿 彰 准教授					
	同 E	辻 潔 准教授					
	同 F	永野 浩二 准教授					
	同 G	駿地眞由美 准教授					
	同 H	馬場 天信 准教授					
臨 床 心 理 学 コー ス 演 習 2	A	倉戸由紀子 教授	同	後期	(修士論文指導) 臨床心理学コース専攻生のみ		
	同 B	中村このゆ 教授					
	同 C	橋本 秀美 教授					
	同 D	中鹿 彰 准教授					
	同 E	辻 潔 准教授					
	同 F	永野 浩二 准教授					
	同 G	駿地眞由美 准教授					
	同 H	馬場 天信 准教授					

上記のA～Eの科目群から、それぞれ2単位以上、計10単位以上を修得し、選択必修の区分から計14単位以上を修得すること。							
選 択	進 路 指 導 特 論	2	三川 俊樹 教授	1年次以上	不開講	(隔年開講)	
	言 語 発 達 支 援 論	2	落合 正行 教授	同	前期	(隔年開講)	
	学 校 カ ウ ン セ リ ン グ 特 論	2	三川 俊樹 教授	同	前期	(隔年開講)	
	育 児 支 援 特 論	2	井上 知子 教授	同	後期	(隔年開講)	
	保 育 支 援 特 論	2	石王 敦子 教授	同	不開講	(隔年開講)	
	教 育 心 理 学 演 習 1	1	田中 俊也 講師	同	前期	集中	
	教 育 心 理 学 演 習 2	1	田中 俊也 講師	同	後期	集中	
	発 達 心 理 学 演 習 1	1	河合 優年 講師	同	前期		
	発 達 心 理 学 演 習 2	1	河合 優年 講師	同	後期		
	心 理 査 定 法 演 習 1	1	井上 知子 教授	同	前期		
	心 理 査 定 法 演 習 2	1	井上 知子 教授	同	後期		
	社 会 心 理 学 演 習 1	1	東 正訓 教授	同	不開講	(隔年開講)	
社 会 心 理 学 演 習 2	1	東 正訓 教授	同	後期	(隔年開講)		

上記の必修科目、選択必修科目および選択科目を含めて、合計30単位以上を修得すること。							
--	--	--	--	--	--	--	--

4. 追手門学院大学地域支援心理研究センター 附属「心のクリニック」紀要編集規程

(趣旨)

第1条 この規程は、追手門学院大学地域支援心理研究センター（以下「センター」という。）規程第13条に基づき、追手門学院大学地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」紀要（以下「紀要」という。）の編集の基本的事項等について定める。

(目的)

第2条 紀要は、追手門学院大学地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」（以下「心のクリニック」という。）の研究成果の発表を目的として、これを刊行する。

(編集委員会)

第3条 紀要の企画、原稿の募集及び編集は、追手門学院大学地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が行い、発行は心のクリニックが行う。

2 委員会に編集委員長を置き、心のクリニック室長がこれにあたる。

3 委員会に編集委員を置き、心のクリニック相談員の中から選出された者2名がこれにあたる。

(執筆者の資格)

第4条 執筆の資格を有する者は次の各号に掲げる者とし、執筆は投稿とする。

(1) 心のクリニックの構成員（室長、相談員、非常勤相談員、事務職員、研修相談員。）に限る。ただし、依頼原稿、資料及び特集についてはこの限りではない。

(2) 院生相談員が投稿する場合は、指導教員を通して論文を委員会に投稿し、審査の結果、論文の採否を決定する。

(原稿の要件)

第5条 紀要に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

(1) 他紙に未発表の原著論文等であること。（口頭発表、研究会等での発表を除く。）

(2) 完成原稿であること。

(原稿の採択)

第6条 執筆原稿の掲載については、委員会において決定する。

(紀要の発行)

第7条 紀要は、年1回の発行とし、毎年原稿募集締切日は9月末日、執筆期限は10月末日、発行日は12月末日とする。

(原稿の形式)

第8条 紀要に執筆する原稿の形式は、委員会が別に定める「地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」紀要執筆要項」によるものとする。

(校正)

第9条 校正は著者校正とし、校正期限を遵守し、校正時に大幅な訂正を行わないこととする。
2 執筆者が前項の規定に反した場合、第6条の規定を準用する。

(抜刷)

第10条 抜刷は、論文ごとに50部を贈呈し、増刷分の費用は申し込み者の負担とする。

(著作権)

第11条 紀要に掲載された論文の著作権は、追手門学院大学地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」に帰属するものとする。

(ホームページへの掲載)

第12条 紀要に掲載された論文の中で個人情報保護の観点から考えて適切と思われる論文は、センターのホームページへ掲載するものとする。

(所管)

第13条 この規程の紀要の発行に関する事務は、センター事務室において行う。

(規程の改廃)

第14条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、センター運営委員会で行う。

附 則

この規程は、2006年4月1日から施行する。

5. 追手門学院大学地域支援心理研究センター 附属「心のクリニック」紀要執筆要項

追手門学院大学地域支援心理研究センター附属「心のクリニック」紀要編集規程第8条に則り、執筆原稿の形式を以下のように定める。

1. 原稿の構成

- 1) 掲載形態 (①②③のいずれか)
 - ① 論文
 - ② 研究ノート
 - ③ 書評・内外学会動向
- 2) タイトル
日本語と英語
- 3) 執筆者名、所属名、連携機関
- 4) 本文・注・文献 (仕上がりはA4判)

2. 原稿の提出方法

- 1) 「MS-Word」のファイル (サイズはA4判) をフロッピーディスクか電子メールに添付して送る。原則としてフロッピーディスクは返却しない。
- 2) ハードコピーも2部提出。(サイズはA4判)
- 3) 原稿は完全原稿とする。(※提出された原稿がそのまま印刷される。)

3. 表記

- 1) 字体
 - 【本文】 日本語：MS明朝体11ポイント、40文字×40行の書式設定
外国語：Times New Roman 11ポイント
 - 【見出し】 原則としてMS明朝体 (強調文字) 14ポイント
副題：MS明朝体 (強調文字) 12ポイント
 - 【注・参考文献】 日本語：MS明朝体11ポイント
外国語：Times New Roman 11ポイント
- 2) 文中の表記
 - 句読点は、原則として「、」「。」を使用し、新字、新カナを使用のこと。
 - また、ヨコ2段組みのため、句読点、カッコ、コロンなどはヨコ組の表記となる。
- 3) 用字用語、表記の統一
 - 原則として、用字用語の統一は行わないので、各自で原稿中の統一をはかること。詳細については、日本心理学会「執筆・投稿の手引 (改訂版)」に基づき執筆すること。
- 4) 日本人以外の人名表記
 - 人名は、原語表記とする。
- 5) 西暦・和暦、数詞
 - 半角アラビア数字を使用すること。

6) 引用文献の表記方法

和書、洋書を分けずに、著者のアルファベット順に記載すること。

7) 論文中的写真・図形・表について

採用時には単独の形式で用意すること。

① 写真：

デジタルカメラで撮影したものであれば、解像度350DPI以上のオリジナル写真。
データを標準的な画像フォーマット（JPEG）のファイルとして、またアナログ
写真で撮影されたものであれば、紙焼きの形で用意のこと。

② 線画（線で構成されたグラフィックス）：

作画したオリジナルのCGソフトからEPS（Encapsulated Post Script）形式に変
換したファイルを用意すること。

③ 表組み：

スキャン画像ではなく、作表した際に使用したソフトのファイル形式で用意す
ること。

追手門学院大学 地域支援心理研究センター附属

心のクリニック紀要 第6号

発行年月

2009年12月

発 行 者

追手門学院大学地域支援心理研究センター附属
心のクリニック

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番15号

TEL 072 (643) 9439 FAX 072 (643) 5790

E-mail : clinic-prcs@office.otemon.ac.jp

制 作

(株)紀伊國屋書店

©Otemon Gakuin University 無断での転載・転用を禁ず